

「実は、自分史を書いてほしい」と言

って来ている人があるのだが引受けてくれまいか。

そんな話を聞いて早くも一年近い月日が流れた。

話を聞いた時は、はじめての仕事だが

半年もあれば出来ると思い、その旨を依頼人に告げた。ところがどうだろう。もう一年近くも経ったのである。

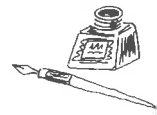
そろそろ寒くなるなあと思っていた昨年の十一月、オプンしたばかりのシルバー人材センターから電話が掛かってきた。

「是非、君にやってもらいたい仕事がある。相談したいからきてくれまいか」と言うのである。

「一体、名差しの仕事って何だろう」

と、私も恐る恐る事務所へ行った。

自分史を書く



後藤 知久

(会員・佐伯市中山区)

それがこの仕事である。

これまで、私もいろんな仕事を頼まれ、なんとかそれをお茶をにごしてきたが、「自分史を書く」などというのは初めてで、一瞬返事をとまどった。聞けば、これまで何人かの若い人達が応募してきたが、いずれも書き上がったものを清書するくらいに考えてきた人が多く、ものを書く経験のない人ばかりだったそうである。

私が返事を渋ったのには、他に理由があった。

退職した翌年、佐伯市が新しく取り組んだ地区公民館の建設が進められ、その第一号が私の地区に完成した。

お世話して下さる方がいて、私は、その初代館長に就任した。

役所に勤めるようになっての初めての職場が教育委員会だった。そして、十三年間も同じ職場で勤務した。私に与えられた仕事は、主として学校建築に関するものだったが、何分、当時は職員の数は少なく、忙しい時は社会教育の仕事を手伝ったりしていたので、その方面にも興味は持っていた。

そんなことで、自分なりにやれることからと、長い間職場のサークル活動でやってきたものを生かしてみるこ

とにした。

最初に取り組んだのは、そのころブームになっていた高齢者のための民踊教室。別に名取りになっていた訳ではないが、それまで十何年、毎年、県民踊連盟の主催する指導者講習会に出席していたので、教えるだけの実績は持っていた。

次に、これは自分の趣味でものを書くのを楽しんでいますが、まがりなりにも大学の文学部を卒業したし、NHKの文章教室でも学んだ経験を持っていたので、教えるというより同好の士と共に楽しもうという目的で、婦人のための文章教室を開いた。

そのうち、これも長い間「花で絵を書く」つもりで始めたいけ花の教授の資格が取れ、これも高齢者の人のために生かすことにした。

あれやこれやで館長の仕事はやめたが、教室の方はそのまま続けている。そこへ市の議会報編集の仕事、史談会の機関誌の編集とあるので、自分史を書く時間が取れるかと、心配したための躊躇だった。

しかし、その反面、例の如く、持って生まれた好奇心がむくむくと頭をもたげ、(思い切ってやってみるか)

とけしかけてきた。

結局、いつの間にか引き受けてしまった。

仕事はまず聞き書きから始まった。「米寿の記念」に自分史の出版を思い立ったと言われるその方は、驚く程記憶力も確かで、また、お話を聞いているうちに、出版の趣旨がよく理解でき、教えられることも多かった。

その一つは、私が受け持っている議会報に対する批評だった。

「後藤さん。そりゃ議会報は確かに読みやすく出来ていますよ。だけど、そればかりでは議会報の役目を果たしているとは言えませんよ。」

市長の考え、議員さんの考え、そうしたものを読んでそこから市民の世論が起きてくるように編集しなければ発行する意味がありませんよ」

と。

とにかく、頼まれたから仕事をしているのではなく、こちらの方が勉強させてもらっている気持に度々なった。一つは、少年のころ同じ体験をされていることにも心を引かれた。

こうして仕事を始めた私は、その日聞いたものをまと

め、ワープロを使って清書した。しかし、これで出来上がりにではない。

人間の記憶というのは完全ではない。ときには独りよがりの面も出て来る。まして、この方は公職に身を置いていた方だけに記憶違いで済まされない場合も出てくる恐れがある。

そこで、今度はその事実を確かめるための裏付けをしなければならぬ。議会事務局に行つて、古い議事録を見せてもらつたり、建設省の工事事務所に行つて、番匠川関係の書類を見せてもらつたり、市立図書館で大分県史をひもといたり、果ては県立図書館へ、県議会事務局へと、足でかせぐ毎日が続いた。

また、若い時に集めた朝日新聞の縮刷版や、明治・大正・昭和と三代の年毎の歴史をまとめたものなどが、ここに来て大いに役立つ。

かつて、私は大学の卒業論文に近松門左衛門の作品の中から「女殺し油地獄」を取り上げ、二百字詰め原稿用紙三百枚にまとめたことがあった。その経験がここでも生きた。あのときも大学の図書館は勿論のこと、早稲田大学の演劇博物館・国立劇場の図書館・松竹本社の図

書館とかけめぐつて資料を集めて歩き、二年間かけて仕上げたものだった。頂度、推理小説で犯人を追求めて行く、そんなわくわくするような興奮が、この仕事にもあった。探し求めて、ようやく目的の資料を手に入れた時の喜びは、たとえ、それが五、六行の短いものでも飛び上がつて大声を出したいようなものだった。

こうして、まとめた原稿を見ていただく。すると、ここでまた駄目が出る。またやり直す。何度が繰り返しながら、この夏に、これまでの分は印刷どおりの字数にしてまとめ上げた。残りはご本人の希望による聞き書きだけになり、遅くとも八月一杯には終わらせようという所まで来た。

だが、予定どおりには仲々進まない。これまでも相手の都合のいい時は、こちらが他の仕事に追われていたりまた、その逆の場合もあつて、それが遠因にもなつていた。

「後藤さん。やっぱり年ですわね。すっかり暑さにやられてしまいました。秋になったらまた始めましょう」

と、張切っている矢先に電話をいただいた。本当にままにならぬものだと思つづく感じた。

そんなことで、この秋も重荷を背負ったままの秋を迎えた。

「自分史を書く」。このことは今関心が高く、中央の出版社でも力を入れていらっしゃるらしく、どこで、どう調べたのか、私の所にも「自分史を出さないか」という誘いが何度かあった。

でも、私にはその気はない。いや、ないというより気がまだそこまで固まらない。私の心のどこかで（お前は自分のありのままの姿をさらけ出すことが出来るか）と、絶えず問いかけるからである。

この執筆の前に、私は吉川英治の「忘れ残りの記」を読んだ。読まれた方もあると思うが、これは、氏の少年時代の自分史である。それを読んで驚いた。貧乏暮らしそのものは、勝るとも劣らぬ貧乏暮らしの経験を持っているので驚かなかったが、自分には盗癖があったと、幾つかの例を挙げているのには驚いた。別に、その事に対して驚いたというより、本当なら隠して置きたいような事を率直に書いてあるのに驚いたといった方がいい。もし、私が自分史を書くとしたら、ここまで書けるだろうか？。その思いが書く事を躊躇させるのである。

はじめにも書いたように、「自分史を書く」という仕事は初めてである。

最初、私は書店でその手ほどきといった本を見たことがあったので、一応、それに目を通して書こうかとも考えたが、それは思いとどまった。というのは、何ものにもとらわれず、白紙のまま取り組んだ方が、自分なりの自分史が書けるのではないかと思ったからである。

先日、大体のことが終わったので、その本を開いて見た。

その中で、私が最も気にしていた「読まれる自分史」と、「読まれない自分史」についての解説に目を通し、私は自分の考えていたことが、それに近いのに安心した。詳細は省くが、たとえそれが人に読ませるために書くのではないにしても、書く以上は、書くだけの価値のあるものにするだけだけは考えなければならぬのではないかと私は思うのである。

はじめての仕事だったが、これによって、私はまた一つ、勉強させていただいたと感謝している。